

善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐる

第11回

女を嫌うための作法（上）

阿部公彦

Abe Masahiko

善意は適切に見せられる必要があった。第9～10回の「英会話の起源」でも確認したように、善意を見せるための最大の道具となったのは言葉である。言葉を上手に使うことで善意はより効果的に表現され、ひいては政治的な力をも生み出す。

このように“善意の言葉”が権力と結びついていくというプロセスは17世紀から18世紀にとりわけ特徴的に見られた現象である。これに先立つ時代、15世紀から16世紀にかけて英語は未曾有の拡大期を迎えていたのだが、やがて言葉の規範を求める声が強まり文法意識も高まった。何より、長く続いた表音主義が、綴りの固定化という考えにとってかわられることで英語の規範化は格段に進む。言うまでもなく、このような規範化を象徴したのは1751年のサミュエル・ジョンソンによる『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*)の刊行であった。適切な「見かけ」をまとった「正しい英語」の重要性は、当時の有力な文人たち——ジョセフ・アディソン、ダニエル・デフォー、ジョナサン・スウィフト——によって推奨され、いわゆる **polite English** は王室を頂点に仰ぐ礼節の基軸としてい

よいよ重要な役割を担うようになっていった。

ところでこの18世紀、言葉とならんでもうひとつ礼節の鍵となったものがある。「女」である。第10回の『礼節の決まり』からの引用にも見られたように、礼節の大きな部分は女性をめぐる決まり事としても組み立てられていた。もちろんその基盤にあるのは、「女性に対してどう振る舞うか」という男性の視点だが、これは「女性はどう振る舞うべきか」という問題とも無縁ではありえない。

実際、18世紀以降の作法書は女性に対する指南書という側面を強めていくことになる。女性的なるものが、言葉とならんでコントロールされるべきものとして、いわば規範化の対象となっていくのである。ただ、このような女性性の規範化は、男が女を型にはめて抑圧するという単純な図式としてだけ理解されるべきものではない。むしろ事態は逆かもしれないのである。規範へ向かおうとする態度の出発点には、「女とは何か?」という問いがある。男たちはこの問題と格闘しつつ、規範化＝女性化というプロセスを通して女性性を自らの内に取りこむことで答えを見つけようとしていたのではないかとも思われる。

礼節と女性性との関係は、そう簡単には答えの出ない、たいへん奥の深い問題である。今回と次回はこの問題の考察への取っ掛かりをつけるために、18世紀の作法書の中でもややキワモノ扱いされてきた『チェスタフィールド卿の手紙』をとりあげてみたい。この書物は本人の許可なくして出版されたものだが、当初からその内容のスキャンダラスさに注目が集まり、作法書の負の面を代表するものと考えられてきた。そこで「女」がいったいどのように扱われているかを見てみたい。

ジョンソンの『英語辞典』と有力パトロン・チェスタフィールド卿

チェスタフィールド卿ことフィリップ・ドーマー・スタンホープ(1694-1773)は当時の政界の重要人物のひとりで、ハーグ駐在大使やアイルランド総監を務めるなど、とくに外交方面で活躍した人物だった。文学関係の知己も多く、アレクザンダー・ポープ、ジョン・ゲイ、ヘンリー・フィールディング、トマス・ギボン、ヴォルテール、モンテスキュー、ジェームズ・トムソンをはじめ、さまざまな文学者と交流があったことが知られている。ただ、ここでまず特筆すべきはサミュエル・ジョンソンとの関係である。

ジョンソンは1746年に『英語辞典』の出版に関して契約を交わすと、まず「新英語辞典編纂計画概略」(‘A Short Scheme for Compiling a New Dictionary of the English Language’ [1747])を公にし、これを改編して後の「序文」の元になる『計画書』(Plan)を書いた。ここにはジョンソンの言語観の基礎となる考えが記されているが、ジョンソンはこれを、政界の有力者でパトロンとして援助を期待できると思われたチェスタフィールド卿に捧げているのである。チェスタフィールド卿は、英語の乱れに大いに危機感を抱いており、権威と秩序の必要性を説いていたし、庶民の言葉は乱れているから、学者と宮廷の言葉を基準に「標準語を作るべきだ」としたり、また、綴りについては音に合わせるのではなく、語源や文法をこそ尊重するべきだとして、まさにジョンソン的な規範の精神とぴったり合う考えを持っていたのである。

ところが、このジョンソンの働きかけをチェスタフィールド卿は全く無視した。どうやらこれは意図的なものではなく、行

き違いの結果らしいということが後の研究で明らかになっているが、ジョンソンはそんなこととは知らず、大いに憤った。しかも、ジョンソンの『英語辞書』がついに刊行されると、チェスタフィールドはその偉業を讃える書評を發表したが、ジョンソンはこれがなおさら気に入らなかつたようで、「今さら何を言うか」という主旨の言葉をチェスタフィールド卿本人に宛てた手紙に記したほどであった。¹ チェスタフィールド卿自身はジョンソンの態度については鷹揚に構えていたようで、ジョンソンからの手紙をおもしろがって知り合いに見せたりしており、またジョンソンの方も後に態度を軟化させたとも伝えられているが、この事件はジョンソンの性格をよく表すこともあって、『英語辞書』をめぐるもっとも有名なエピソードのひとつとして語り伝えられている。

チェスタフィールド卿のいわくつきの「手紙」

ところでこのチェスタフィールド卿は、単なるパトロンであつただけではなく、彼自身がある出版物の著者として名前を知られることになる。それが『チェスタフィールド卿の手紙』

¹ 1755年2月にジョンソンからチェスタフィールド卿に宛てた手紙には次のような辛辣な一節があつた。‘Is not a Patron, my Lord, one who looks with unconcern on a man struggling for life in the water, and, when he has reached ground, encumbers him with help? The notice which you have been pleased to take of my labours, had it been early, had been kind; but it has been delayed till I am indifferent, and cannot enjoy it; till I am solitary, and cannot impart it; till I am known, and do not want it’ (Boswell, 185).

Lord Chesterfield's Letters (1774) である。この書物が公になるまでにはちょっとしたいきさつがあった。チェスタフィールド卿には、フィリップという非嫡子がいた。この子をチェスタフィールド卿は大いにかわいがり、将来は自分と同じような外交官の道を歩ませようと小さい頃からさまざまな処世術を伝授するために彼に宛てて手紙を書き続けたのである。死後、この一連の手紙がフィリップの未亡人によって他の書簡とともに刊行され、広く世間に知られるようになった。

これだけ聞くとよくある話のようであるが、この手紙にはさまざまな因縁がからんでいる。まずチェスタフィールド卿のフィリップへの愛情は、彼自身の父との不仲と関係していた。長男でありながら正当な財産を相続できなかったこともあり、チェスタフィールド卿の上昇志向や世間に対する警戒心はかなり強いものとなっていた。チェスタフィールド卿は若い頃は大いに女性と遊び、結婚したのはようやく 39 歳になってからだったが、相手は政略結婚まがいに選んだ 40 歳の女性で、この人自身がジョージ一世の非嫡子だったとも言われている。こうしてさまざまな意味でねじれた親子関係のただ中であつたチェスタフィールド卿が、自分の非嫡子を相手に愛情をこめて手紙を書き続けたというわけである。しかし、不幸なことにフィリップは 39 歳の若さで、父の夢を果たせぬまま他界してしまう。

因縁はこれにとどまらない。これだけ愛情を注いだ父には内緒で、実はフィリップは 20 代の若さでユーゲニア・ピーターズ (Eugenia Peters) というアイルランド貴族のこれまた非嫡子と秘密結婚をしていたのである。チェスタフィールド卿がこの女性の存在を知ることになったのはフィリップの死後というのが定説だが、ひょっとすると、これはユーゲニア自身が

チェスタフィールド卿の手紙で自分が言及されている部分を削除したためかもしれない。² いずれにしても、チェスタフィールド卿とユーゲニアの間には信頼関係がなく、遺言状の中で彼は孫には遺産を残したものの、すでにその存在を知っていたユーゲニアには一銭の財産も残していない。

さて、このような目にあつたフィリップの未亡人の手には、自分の夫に向けてチェスタフィールド卿がせっせと書き送つた手紙が残されたわけである。ユーゲニアは器量はそれほどでもなかったけれど、非常に知的で聡明な女性だったと言われている。ユーゲニアが考えたのは、チェスタフィールド卿の手紙を出版しよう、ということだった。政界の有力者であり、多くの著名人とも知り合いだつたチェスタフィールド卿は、今で言えばたいへんなセレブであり、手紙の出版がかなりの利益をもたらすであろうことも予想できた。

しかし、問題は手紙の内容だった。チェスタフィールド卿の手紙には、物議を醸しそうな部分が含まれていたのである。ユーゲニアが騒ぎの発生を願って手紙の出版を思い立ったのかどうかはわからないが、編集を依頼されたホラス・ウォルポールやエドワード・ギボンが遺族の怒りを恐れて申し出を断つたり、出版差し止めを求める遺族の抵抗があつたりしたことからもわかるように、すでに計画段階から『チェスタフィールド卿の手紙』の刊行は波乱含みだつたのである。出版差し止め要請

² メイヨールは残された手紙の原稿や出版過程を詳細に検分したうえで、「チェスタフィールド卿がユーゲニアのことを知らなかったなどということはありません。編者であつたユーゲニア自身が『手紙』から自身の痕跡を慎重に消し去つたのだ」という趣旨の結論を導き出している (57)。

は結局、却下され、1774年、手紙はユーゲニア自身の編集により2巻の美装本として出版される。果たして、大物政治家のプライベートな手紙は大きな騒ぎを引き起こすことになった。³

偽善の技術

『チェスタフィールド卿の手紙』のうち、息子に宛てたものは、いかに世の中でうまく生きていくかということ、かなり具体的に説くものだった。父と子の間のひそひそ話のようにして語られているということもあり、そこには公には口にできないであろうような内容も含まれている。とくに女性に関する意見はかなり辛辣だった。

宮廷の陰謀となるとだいたい女たちがからむものだ。でも、女たちには注意しろ。信用してはならない。(145)⁴

女は信用できない、女に足下をすくわれるな、というのが、女性経験豊かだったチェスタフィールド卿の到達した境地だったらしく、父は息子に繰り返し女性との付き合い方を指南しているのである。

だいたいの女はひとつしか興味の対象を持っていない。自分の美しさである。自分の美のこととなると、どんなに褒められても足りないのだ。どんなに醜い女でも、お世辞になびかない者はいない。とんでもない顔をしていてさすがにそれを

意識せざるを得ないような人でも、自分ではスタイルや雰囲気のおかげで十分それをカバーできているかと思っていたりする。スタイルが悪くても、顔のおかげで救われているかと思っていたりする。どちらもダメでも、自分には気品があるから、などと考える。何とも言えない風情があって、美しさよりずっと魅惑的だなどと思っているのだ。(60-61)

まさに典型的なミソジニーである。見かけにとらわれ、うぬぼれゆえに実態を見誤っている女たちをあざ笑おうとする態度がありありである。

しかも、手紙の中には息子に対して露骨に情事を薦めるような一節もあった。チェスタフィールド卿はふたりの女性を実名で名指し、「愛情なら A 子さんだね。単なる情事なら B 子さんの方がいい」というようなことさえ言っているのである(231)。放蕩で知られた卿ならではの、女性を蔑視し軽んじようとするこのような態度は、当然ながら教会関係者を中心とした保守派からの猛反発を食うことにもつながったわけである。

しかし、こうした毒舌めいた言い方の裏で、チェスタフィールド卿はまさにその「見かけ」や「表面」の持っている効果にもたいへん意識的だった。別の箇所ではチェスタフィールド卿は次のような助言を息子にしている。

女を心地良くしてあげ支配することが、先々君の役に立つかもしれない。女というものはしばしば他人を心地良い気分にして支配するのだ。(217)

ミソジニーの裏には、きわめて計算高い戦略家の姿が覗く。これは単なる女嫌いというよりは、より広く人間嫌いと言って

³ こうした出版事情についてはオックスフォード版に付されたロバーツの「イントロダクション」に詳しい。

⁴ 以降、とくに注記がない場合は『チェスタフィールド卿の手紙』からの引用はオックスフォード版に基づき、その頁番号を記す。

もいような態度だろう。

女性に限らず、「他人を信用するな」、「いつも用心深くあれ」、「自分の手の内は他人には見せるな」と猜疑心と計算に満ちた行動をとる、それがチェスタフィールド卿の手紙に一貫して見られる処世術の基本だった。ではそのキーワードとなったのは何だろう。次回はそのあたりを見ていきたい。

〈文 献〉

*『チェスタフィールド卿の手紙』からの引用は、比較的入手しやすい Oxford Classics 版 (Lord Chesterfield. *Letters*. Ed. by David Roberts [London: Oxford U.P., 1992]) を元にして拙訳し頁を記したが、この版に未収録の「肉切りエピソード」については以下の版から採った。

Stanhope, Philip Dormer. *Letters Written by the Late Right Honourable Philip Dormer Stanhope, Earl of Chesterfield, to His Son*. Ed. by Eugenia Stanhope. 2nd edn. 4 vols. (London: J. Dodsley, 1775/1774)

その他の文献は以下のとおり。

Boswell, James. *Life of Johnson*. Ed. by R.W. Chapman (Oxford: Oxford U.P., 1998/1980)

Davidson, Jenny. *Hypocrisy and the Politics of Politeness: Manners and Morals from Locke to Austen* (Cambridge: Cambridge U.P., 2004)

Mayo, Christopher. “Manners and Manuscripts: The Editorial Manufacture of Lord Chesterfield in *Letters to His Son*,” in *The Papers of the Bibliographical Society of America*, 99.1 (2005), 37-69.

Pullen, Charles. “Lord Chesterfield and Eighteenth-Century Appearance and Reality,” in *Studies in English Literature, 1500-1900*, 8.3 (1968 Summer), 501-15.

Roberts, David. ‘Introduction’ in Lord Chesterfield. *Letters*, ix-xxiii.

山田勝『ダンディズム——貴族趣味と近代文明批判』(日本放送出版協会 1989)

——『ブランメル閣下の華麗なダンディ術——英國流ダンディズムの美学』(展望社 2001)

(東京大学准教授)